

先生。システムとしての 焼き畑ってなんですか？ そこから紐解く人間社会は どうみえますか？

2019.1.25（金）19:00-21:00

東京学芸大図書館カフェ note cafe

一般 ￥1500 / 学生 ￥500

1ドリンク付き

吉野先生と

一緒に

世界を面白がる

トークゲスト：吉野晃教授

マスター：藤井健志教授

聞き手：熊井晃史

Vol
30

森の中の日が当たらないところで農業をするのはバカです、とか、人口の少ない村で棚田を作るのはアホです、といった威勢のよい言葉がポンポン飛び出したカルチャーカフェであった。もしかして、気を悪くした人がいたかもしれないが、文化人類学者の吉野先生が、焼畑耕作のメカニズムを説明してくださる中で、飛び出した言葉である。

この日はシステムとしての焼畑とは一体何だろうと勇んで行ったのだが、まずはタイの山地にいる少数民族のヤオ族の話から始まった。ヤオ族は中国から、少しずつ東南アジアに移動してきた民族で、ベトナムやラオスにも現在住んでいる。一番落ち着きのない連中が、定住せずに、一番遠いタイの山中まで移動してきたのだと、吉野先生はおっしゃっていた。19世紀半ばのことである。

彼らは、移動しているから先祖の墓などはどこにあるのかわからないのだが、「遠隔操作」で墓を掃除するという。「・・・？」と、聞いていた人たちは皆、思ったに違いない。何のことはない、現在住んでいるところに墓のレプリカを作り、その周囲を掃除することで、ラオスだかどこだかにある先祖の墓を掃除したことにしちゃうのだそう。なるほどね。

ヤオ族は焼畑をしながら家族単位で移動しており、2～30年も同じところにいる家族もいれば、5年ぐらいたつとサッサと移動する家族もいるという。ヤオ族の村は共同体的な性格が希薄であるようだ。意外だったのは、だいぶ前から単純な自給自足ではなく、換金作物で現金収入を得ながら生活をしていたということだ。かつてはアヘン（ケシ）も栽培していたということで、アヘンの話で少し盛り上がったのだが、ここでは省略。

さて焼畑である。定着型焼畑耕作と、開拓型焼畑耕作というのがある
そうで、前者は村落の周辺の土地を綿密にローテーションして切り替
える方法である。かつての日本の焼畑はこれだったという（いかにも
日本人がやりそうなことである）。ヤオ族は開拓型で、各家内集団が
独自に判断して、適宜、森に入り、木を伐り、焼くという。ちなみに
土地は誰のものでもない。言い換えると土地所有の観念がない。一回
の火入れで燃えているのは一時間弱だそうで、けっこう早く鎮火する。
更地になったら種をまくのだが、まず土地を耕してから種をばらまく
やり方と、穴をあけてそこに種を放り込むやり方がある。野菜や稲
（陸稲）、トウモロコシなどを栽培する。一旦木が伐られた土地は、
やがて草が生え、灌木となり、再び森は再生する。このサイクルを利用
するのが焼畑耕作である。

焼畑耕作は労働効率は良いのだが（つまり、あまり大変でない）、そ
れで支えることのできる人の数は、それほど多くない。だから人口密
度が低ければ、斜面で行う農耕としては理想的だという（だから人口
の少ない村で、多くの労力を必要とする棚田を作るのはアホなのだ）。

焼畑耕作の各段階の丁寧な説明に加えて、ヤオ族の話もあったので、
最後は時間が少々足りなくなった。あと5時間ほどあれば、もっと説
明できると吉野先生はおっしゃったのだが、そういうわけにもいかず、
そのため、猛スピードで焼畑のスライドを見ることになった。少し目
が回ったのだが、知らない知識が次から次へと威勢のよい言葉ととも
に開陳されたので、とにかく愉快であった。

藤井健志

東京学芸大学教授・元副学長／まちのカルチャーカフェ主宰・マスター

東京学芸大図書館カフェnote cafe発起人